
サドな彼女の神殺し

成瀬 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サドな彼女の神殺し

【Nコード】

N1028I

【作者名】

成瀬 葵

【あらすじ】

何の変哲もない日常を送る俺こと『秋葉原巡』は彼女の『陣堂臥畏クロン』科学に対する規格外の行動の一つ、『魔女降臨の儀』無理やり参加させられた。しかし、魔女降臨の儀の誤りで、『神監獄』という天使の住む世界に迷い込んでしまった。彼女は、そんな中、天使たちから『神殺し』を引き受けてしまう・・・そんなこんなで、俺の生活は彼女と何かのファンタジーの所為で大きく、そして非常に変わるのだった

第1話 其の女 いかれている（前書き）

今回の小説は毒舌を大量に含んでおりますので、ご注意ください

第1話 其の女 いかれている

いつもと同じ、穏やかな学校生活。俺の周りはノンファンタジーであり、科学によって肯定されている宇宙の太陽系の第三惑星の地球のアジア圏の日本にいる、極々当たり前で平凡な毎日が約束されていた。

だが、ただ一人。その科学と言う思考の檻から、外れたものがあった。それが――

「あつくん。今夜にでも、ワタシは魔女を降臨させようと、こころに決めたわ」

・・・そう、それがこの、俺の彼女であり、毒舌を己の美德とし、科学を否定した女。『陣堂臥畏 クロン』、だ。

「クロン。お前はまた、何言ってるんだ？」

放課後の誰も居ない教室で、机を会わせて仲良く勉強会をしているときに、クロンはいった。

「そうね。あつくんにそんな高度な言語で言っても、それは犬と会話をする位、意味のないことだったわね。忘れてたわ」

「俺は、今の発言こそが意味のないことだと思っぞ」

「何言っているの？ 『科学があるから魔法は証明され、魔法があるから科学が生きる』と言う言葉を知らないみたいね。恥すべき無知だわ。一生分の税金を国に納め、ワタシに知識料を払ってから、

存分に自害なさい」

「ときたま、お前が本当に俺のことを好きなのか疑いたくなる」

「あら、あんなにワタシの家で、夜に激しく愛を囁いてじゃない」

「変な表現すんなっ！！　大体あんなのお前が俺が眠ったことを確認してから、テープに録音してただひたすらに『好きよ、好きよ』と言った感じのを、耳元でかけてただけじゃねーかつ！！。精神が崩壊しかけたわっ！！」

「それも、愛の一つよ、あつくん」

「そんな愛なら、自分から願い下げだ」

「話は戻るんだけど――」

人の話、聞いてねええええ〜！！
なんでですか！？、コイツ。
鬼ですか！？

「鬼じゃないわ。アナタの彼女よ」

「遂に、読心までっ！！？」

「読心じゃないわ、読顔よ」

「余計にイヤだわっ！！」

「いい加減、アナタの突込みにも飽きてきたわ。そろそろ話を戻しましょう」

今になって思う。なぜ、コイツを彼女にしたのかと。だが、今其の回想に入るわけにはいけないので、省略。

「さて、魔女の降臨をするという話なんだけど」

「どーせ、また俺を巻き込む気じゃないよな？」

「『巻き込む』なんてとんでもないわ」

よし、それなら逃げ出せそうだな――

「色々、こき使っただけよ」

「いやあああああああああああああああああ――！」

「あら、ワタシにこき使われるのが、そんなにうれしいのかしら？
とことん変態でマゾだなんて気持ち悪いわ。いっそ、窓からとび
おれば？」

「ぜひ、そうしたい」

「駄目よ。アナタは一生ワタシが飼いならすんだから」

「……………死にたい」

「それじゃ、このあとすぐに、屋上に行って頂戴。ワタシは色々と
準備させてもらうから」

「俺の精一杯の逃避は無視かいつ!」

「それじゃ、よろしく」

そう言って、クロンは教室を後にした。

とほほ。いや、こんどこそ、屈してなるものか!・・・

そんなことを思いながらも、屋上に向かう俺は、変態なんだろう
か・・・

第1話 其の女 いかれている（後書き）

いかがでしたか。

感想、よろしくお願いします

第2話 魔方陣のなかへと・・・

俺が、勉強道具を片付け、嫌々な気持ちを溜息と言う形で表わしながら、屋上へと辿り着いた。

そこで、俺が見たものは、クロンが一生懸命に地面に何かを描いている、と言う事だ。

「あら、先に行つてと言つておいたのに、ワタシより後に来るなんて、どれだけのろくさいのかしら？ ペンギンでも、もう少しは速いわよ。これってつまり、アナタは鳥類以下って事ね」

「いやいや、お前が速すぎるだけで――」

「言い訳なんて聞きたくないわ。この童貞風情が」

・・・なんか、変なことをいわれた気がするが、気にしないでおこつ。気が持たないから。俺は、クロンが書いている何かに近づいた。

「何、描いてるんだ？」

「馬鹿でも分かる、魔方陣と呼ばれるものよ。それが分からないアナタは、馬鹿以下ね。何と呼べばいいかしら？」

「はいはい、もう好きにしてくれ・・・」

そう言つて、俺はフェンスに腰掛けて座った。

「で、本当に魔女を呼び出す気なのか？」

「当然よ。でも、よくある一般的なイメージの魔女じゃないわ」

「なんだ、それ？」

「つまり、馬鹿以下のあつくんに分かりやすく、かつ無駄な時間をわざわざ裂いて言えば、『ホウキに跨って空を飛ぶ魔女』ではなく、ここでの魔女と言うのは『神に対して大罪を犯したマッド・ジョーカー』と言う者のこと。ちなみに、馬鹿以下のあつくんでも、間違わないように、ここからは、漢字で『魔女』ではなく、『マジヨ』と言う事にするわ。感謝なさい、下等生物」

「その毒舌は、もういいよ」

「そう」

そう言っ、クロンは動かしていた手を止め、立ち上がった。

「準備ができたわ。早速、こっちに来てワタシの靴を舐めなさい」

「丁重にお断りします」

「何を言っているの？ 変な独り言はやめて頂戴。いいから、来い。」

一回溜息をついて立ち上がり、クロンのいる陣の真ん中へと足を進めた。

「では、手を出してもらえるかしら？」

「え、こう？」

右手をクロンに差し出した。そしてクロンは、その右手をギュッと両手で握り締めてきた。

「あら、あつくんだったらそんなに赤くなって、どうしたのかしら？ そんなにワタシに触れられてうれしいの？ 不潔だわ」

「なぜ、人の行動に対して一々文句をつける？」

「さて、はじめるわよ」

相も変わらず、人の話は無視ですか、この野郎。

何てことを思っているうちに、地面の魔方陣が光りだした。そして――

「あつくん。ワタシが一声上げたら、この繋いだ手を思いの限り、地面にぶつけてもらえるかしら？」

「ああ、いいけど。なんで、光りだしたんだ？この魔方陣。」

「そんなの、神たるワタシのチカラに決まっているじゃない？ それさえも忘れたの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

敢えてここは、スルーと言うことにしておこう。どうせ成功しないんだし・・・・・・・・

「さあ、いくわよっ！『レジガンドッ！！』」

その瞬間、俺はクロンに言われた通り、地面に2人の手をぶつけた。しかし、地面は本来の硬さではなくなっており、そのまま、魔方阵の中へと飲み込まれていった……

第2話 魔方陣のなかへと・・・（後書き）

いかがでしたか？

こんな感じで進めていこうかと思いますので、感想等よろしく願います。

第3話 森で出会った少女

「う……うん……」

今まで、硬く閉ざしていた瞼を、俺は開けた。そして、そこには俺の理解の外のようない出来事が我が物顔で存在していた。それは、目の前に見たこともない木漏れ日が射す、森の中だった。

「な、何なんだっ！！ これは！！」

「『何なんだ？』って言われても、それは『はい、これは森の中ですね』としか言いようがないわ。遂に目の前の現象にさえ、異論を唱え始めるとは、社会の役に立たないから、早急に自害願えるかしら」

「この状況で、相も変わらずの毒舌か。てか、魔女を呼び出すんじゃないかったのかっ！」

「ああ、その事なのだけれど。どうやらワタシは、『マジヨをワタシ達の世界に呼び出す魔方陣』を描いたつもりが、実は『ワタシ達がマジヨの世界に行く魔方陣』を描いてしまっていたらしいわ。ちなみに、『魔女』ではなく『マジヨ』よ。2、3分前のことから忘れてるなんて、アナタの脳のリセット機能は、コンピュータのように的確で優秀なのね」

「てめえ……自分の失敗を棚に上げやがって……」

「あら、棚になんて上げられないじゃないの。どこにも棚なんてないのだから。それとも、あつくんには麻薬の禁断症状のような見え

てはいけない幻覚が視えているのかしら？ それはそれで、実に滑稽だわ」

「……いい加減にしろよ。そろそろ限界点が近いんだからよ
お」

「喧嘩？ 売られたのなら買うわよ。いくらで買ってほしい？ あつくんのことから、3 銭ぐらいが妥当かしら？」

「もういい、ここでノタバラしてやるっ！！」

そして、俺はクロンに飛び掛った。何とでも言ってくれ。『女子に手を上げるなんて最低な男』でも、『変態』とでも。だが、今の俺は……こいつを殴らないと気がすまんっ！！！！

そして、3 分後……

「まだやる気？ いくらワタシでも、これ以上はやりようがないのだけれど」

「はい、私めが悪うございました。ですから、私めの背中をこれ以上踏まないで……」

「イヤよ。主人に楯突いた身の程を知ればいいわ」

とほほ。自分の弱さが身に沁みるぜ……もうイヤだ、こんな仕打ちっ！！

「あ、あのう……」

と、そんなことを思っていると、目の前から声が聞こえた。声の方向に首を向けてみると、身長158CMぐらいの少女が立っている。

「何かしら」

「い、いえ。その……お二人にお聞きしたい事があって……」

どうやら、クロンも彼女の存在に気付いているようだ。

「いいわよ。存分に伺ってしまうがいいわ」

と、その数秒後、彼女の口からこんな言葉が漏れたのだった。

「お、お二人は……断罪者の方々ですかっ!!」
ジャッジメント

そして、俺達2人は声を揃えて言うのだった。

『はあ?!』

第3話 森で出会った少女（後書き）

いかがでしたか？

感想等、よろしく願います。

第4話 エンジェルズのソフィア

森で出会った小柄な少女は、俺達のことをすっかり断罪者ジャッジメントなるわけの分らない者だと思いついて入っているようだ。そして彼女は、村の長老に（どこのRPGだよっ！）俺達を紹介したいと言いついて出た。まあ、そういう件で、今は、森を抜けるためクロンと俺は少女の後を着いて行っている。

「ちよっと、アナタ。ワタシ達を案内するのはいいとして、幾つか質問に答えなさい」

「はい。いいですが・・・」

「まず、アナタの名前は？」

「私は、ソフィアと言います」

「そう。で、ここはマッド・ジョーカーが居る『神監獄』で間違いないのね？」

「はい。そうです」

「そう。次に、断罪者ジャッジメントとは何かしら？」

「そうですね・・・掻い摘んで説明すれば、貴方方のように『人の身でありながら、この神監獄に入ってきたもの』ですね」

その言葉を聞いて、軽く「そう」と言いつてクロンはだんまりと決め込んだ。だが、俺の退屈が納得するはずもなく、即座にクロンに話題を振った。

「しかし、お前はこの事態に豪く、冷静だな」

「当然じゃない。こんなの想定範囲内だからよ。まあ、ゴミのように人間ピラミッドの底辺を、よくも飽きもせずに縦横無尽に這いつくばっている、あつくんには判らないでしょうけど」

「そこで、俺はお前に反論するっ！！」

「まあ、何時にもなく強気ね。いいわ。あつくんがどんな痛いことを平気に、勝ち誇った主人公のように言っても、20%ぐらいは受け止めてあげるわ」

「むう、一々釘を刺されるのは痛いが……敢えて言わせてもらおうっ!!」

そして、俺は思いの全てを注いで、言葉を発した。

「俺の方が、頭脳的に、お前の、上なのだぁ!!!!!!」

「………わーすごいわ」

「なんだその、どうでもよさ気な発現は!？」

「だって、つまり『頭のいい人間』有能』いうことでしょ？ 人間性からしてアウトな、あつくんにはそれぐらいのチカラが無いと、生きている意味すらないそれこそ、排泄物やゴキブリなんかよりも程度の低い下等生物になったしまうわ」

「俺は、頭だけですかつ?! 良いところ?!」

「それ以外に、何かあったかしら? 『気さくなところ? そんなの見たことないし、』女子にすぐ、いちやもんつけるところ? それは、もはや小さい人間である証を露呈……」

結論は、『頭も大して良くないから、人間ですらない』で、いいわね」

「俺のアイデンティティ、全面否定?!!!」

「あ、ごめんなさい。一つ、訂正があったわ」

「おお! さすが俺の彼女! それは一体どんな良いところ——」

「生物のカテゴリに入る事すら、おこがましいわ」

「もうっ!! いやだあああああああああ!!!!!!」

「あもう、いいですか?」

「なにかしら、ソフィア?」

「いえ、そろそろ着きますので……」

「判ったわ。ほら、さっさと立ち直りなさい。ごみ」

「もういいよ……」

そんなことに、一々めげてはいけないと思うが……男は、つらいね。色々。

そんなことを思っているうちに、森を抜けており、辺りには人々の集落を見つけることができた。

「つきました。ここが、私たちエンジェルズの村です」

ソフィアは、笑顔で振り返り、そう言った。

第4話 エンジェルのソフィア（後書き）

いかがでしたか？ 感想等よろしくです

クロンの考察

「それでは、長老を呼んできますので、ここで待っていて下さい」
そう言つて、ソフィアは長老の家へと入っていった。その間、俺達は外の入り口で待たされて居る事になる。

「あつくん。ワタシが思うに、この状況はつまずぎると思うの」

「は？ 何が？」

「はあ・・・ とことん低能なのね。愚かさより哀れみを覚えるわ」
「へいへい、そうですかつ」

「まったく・・・まあ、今の段階ではあつくんに対して時間を裂くのは惜しいから、今は何の反論もなしで聞いてほしいの・・・」

「ん？・・・別にいいが・・・」

そして、クロンは神妙な仕草で、発言を開始する。

「まず、着目すべき点は『森に現れた少女』と言う点」
「？」

「彼女、いえ、ソフィアがワタシ達の前に現れたのが、ワタシ達がこちらに着いて3、4分のことよ？」

ソフィアの言い方から推測するに、ワタシ達のような『この世界のイレギュラー』がそう何度も出現しないと思うの。それにも関わらず、こんな短期間にワタシたちを発見、誘導した。これが偶然だと思つ？」

「まあ、それはそうかもしれないが、一概にそうとは——」

「次に、着目すべき点は『ソフィアを含めたここの住人』と言う点」

「俺の話は、無視ですか」

「そこ。反論、いえ発言は控えなさい！」

「・・・すいません」

「さつきも言っていた通り、この空間は『神に対して大罪を犯した者の監獄』よ。それにも関わらずに、ここには狂気が渦巻いて居ないどころか、希望の感触さえするわ。何より、ここからは悪意でさ

えも存在して居ないように感じる。これって、変を通り越して、異常よ」

「・・・・・・・・・・」

「この2つの事から、ワタシはこう推測するわ。『この住人は、神に対して大罪を犯してはいない。でも、何らかの計画を目論んでいる。その計画の遂行のためには、ワタシ達、ジャッジメント断罪者』のチカラが必要不可欠」ってとこね。」

「じゃあ、その理由は？」

「さあ。でも、色々とかめめないといけないわね」

「・・・・・・・・・・」

確かに、ソフィアみたいなふんわりとした感じの女の子がそんな大それた事をしたとは思えない。

やっぱり、クロンの言うとおり、調査してみるのが先決だ。

「御2人とも、中に入ってください」

姿を見せずに、中からソフィアの声が聞こえた。それに反応してか、クロンもこんな事を言った。

「さあ、まずは『長老』から、いろいろ聞き出してみましよう？」

クロンの考察（後書き）

いかがでしたか？

ここから、さらに話を加速させていくので、よろしくお願いします

第6話 とある天使の死について

ソフィアに案内されるまま、長老と謁見を行うという茶の間に行き着いた。もうそこには、一人の人影の姿があつた。

「どうぞ、椅子にお掛けください」

ソフィアが勧めるまま、二つの椅子に俺達は腰掛けた。目の前には長老と思われる、老人が座っていた

「おお、そなた達か。ソフィアの言っていた断罪者^{ジャッジメント}は。

ワシはローグ。この地域の責任者みたいなものじゃ」

「お初にお目にかかります、ローグさん。ワシは陣堂臥畏^{しんどうが} クロンと申します。こっちの子は気軽にグズと呼んで上げて下さい」

クロンが軽く挨拶したのを聞いて、「そうか、そうか」と笑顔で返してきた。てかつ！ グズは酷いんじゃないのっ！？ グズはっ！！？

「ところで、ローグさん。ワタシ達は、いえワタシは貴方に何点かお聞きしたい事があります」

「おお、別にかまわんが」

「ありがとうございます」

その後、クロンは慎重な面持ちで、さっきの疑問を呈した。

「まず、始めに。貴方方は、天使なのですか？」

「ああ、そうだとも」

「そうですね。では、こんなお話を耳にしたことはございませんか？『かつて、崇高な神を裏切り、その罰により、双翼を焼き切られ、地下深くの闇に葬られた大天使』のお話を・・・」

「っ！！！！！！」

長老は、その言葉を聞くや否や、驚愕の表情を隠せずに居た。いや、隠そうとしているが、逆にそれが目出ってしまっている感じだ。その中でも、クロンは当然のように会話を進める。

「しかし、この話は事実を180度歪曲されています。正しくは『

天使が神を裏切った』のではなく、『神が天使を裏切った』です。違いますか？」

相変わらず、ローグは顔を伏せ、汗を掻いているのか、何度も額を拭っている。

「当然、そんな事実が天使の間で広がれば、神への忠誠心が削がれるどころか、神と天使による全面戦争が始まる可能性があった。当たり前です。なんせ、大天使にもなれば、他の天使からも信頼、人望も厚いことでしょうから。」

「……それを……どこで……」

「さあ。強いて言うのであれば、『人間の知識は、神のそれに近い部分がある』でしょうか」

「……」

「そして、貴方は、いえここに居る貴方は知っていたはずです。先ほど語った真実を。」

だから、こう思ったんじゃないですか？ 『自分達で神への謀反を立てよう』と。しかし、それにはある問題があった。それが――

――

「どうやって、神を討つか……か」

そこ言葉を聞いて一番驚いたのが、クロンだった。なんせ、これから言い包めるはずの長老がそう言ったのだから……

「ああ、ほとんど君の言うとおりだ。我々は、神に叛こうとした。

しかし、太古の昔よりの契約により、『天使は神を傷つける事ができない』、だから、君達に我らの望みを託した。

どうか……どうか、頼む！ われらの望み、聞き届けてはくれまいかっ！」

そう言って、ローグは、頭を深深と下げた。その言葉に声にならない悲痛な叫びを込めて……

第6話 とある天使の死について（後書き）

いかがでしたか？ 感想等、よろしく願います

第7話 大天使、その名は『ルシファー』

「結局、引き受けちゃったけど、よかったのか？」

ローグとの謁見が終わって、俺達は少しの間、外の散策のため、散歩がてら森の中を進んでいた。

「別に。あの場合、引き受けておいたほうが、こちらとしては都合がよかったのよ、クソオタク」

「誰がオタクだ、誰が！」

「あら、クソは否定しないのね。そういう謙虚で自分の立場を理解できるようになっているとは、成長していたのね」

「ああっんもうっ！！ どうして、お前から『デレ』が出ないんだっ……！」

「そんなにデレて欲しかったの？ それならそうと早く言えばいいのに」

「えっ！！ デレてくれるのか！？」

くそう！ なんだかんだで俺のこと、判ってくれているんだ――

「一生、デレてなんかやるもんか」

「きゃああああああああっああああああああああああああっ……………」

「あら嫌だ。そんなの、嘘の嘘に決まってるじゃない」

「嘘をさらに打ち消しやがったっ！！ 結果、変わってねえーしっ……………」

「よく分かったわね、ご褒美に、ワタシの靴を舐めさせてア・ゲ・る。」

「キモいわ！嫌だわ！死にたいわ！」

「……一々、うるさいガキね」

「うわん……」

もういいよ、俺。よく頑張った。もうこれ以上はいい。頑張らなくていいんだ……

「そういえば、あつくん。アナタ、ワタシに聞きたいことがあったんじゃないの？ 良い悲鳴を提供してくれたから、ある程度なら、毒舌なしで答えてあげなくもないわよ」

「……どうして、分かった？」

「あつくんの事なら大概分かるわ」

「そ、そうか……では聞く。さっきの天使の話、どこで知った？」

「あら、そんなこと。あまり誉められた事じゃないのだけれど、ワタシの一族は代々、エクソシストを生業としていて——」

「待てっ！待てっ！待てっ！」

「あら、何かしら？」

「聞いた事ないぞ！？ そんな話！！」

「そりやそうよ。言っていないもの。逆に知っていたら、殺してやるわよ、その顔を美しく、破壊して、ね」

「……怖いわ……」

「まあ、そんな腹の足しにならない戯言は置いて。ワタシの一族は、魔祓いを専門に活動しているという、科学グラーチマンと言うものの干渉を受けにくい環境で育ったの。当然、聖職者の英才教育を受けていたわ、ワタシも。で、ある日の事。ワタシは興味がてらに、魔族の事について色々調べたの。そこで、魔族の始祖とも称すべき、魔を発見したの。それが——」

「あの、天使だった。てわけか。」

「そう。その天使の名は『ルシファー』。かつて神に最も近いとされる大天使『ミカエル』と同等か、それ以上の実力者よ。でも、考えてもみて。それほどの大天使なら、わざわざ神の座を奪うために

戦争をしなくても、いずれ席が周って来るとは思わない？ それなのに、戦争をした。勝てる見込みもないのに……」

「で、『その疑問を追及して、さっきの結論に至った』って訳か」

「そう。そしてここに来て、その『推測』の域だった結論は、『確信』の域に達したのよ。まあ、神殺しを引き受けたのには、他にも理由があるのだけれど……」

そう言つて、クロンは苦しそうに歯を噛み締めていた。そこで、俺は話を変えようと、クロンに話し掛ける。その瞬間、大きな爆発音が耳に響いた。

「何だ！今の！」

「この方角……村の方からだわっ！！」

そして、俺達は、村の方へと、駆け出した……

第7話 大天使、その名は『ルシファー』（後書き）

いかがでしたか？

感想等、よろしくです

第8話 ケルビムとドミニク

「これはっ……何なの!？」

急いで村へと舞い戻った俺達の前には、ほぼ壊滅に等しい村の残骸と、無数の此処に住んでいたであろう住人の死体が転がっていた。

「教えてあげましょうか？ 招かれざる客人よ」

その声が聞こえて俺達が振り返ると、真っ白の双翼を持った2人組みが立っていた。

「これは……貴方たちがやったの……」

「そうですよ。 可哀想に。 君達さえ此処に来なければ、彼らも、もう少しは生きれましたのに」

「……」

クロンはただ、ひたすらに無言を貫いている。その眼に、溢れんばかりの『何か』を乗せて……

「……お……御二人共……にげ……逃げて」

瓦礫の中から、ソフィアが今にも倒れそうな足取りで、俺のところに来て言った。

「おやおや。まだ生き残っていたとは。意外にしぶといですねえ．．．」

「．．．．．どうして．．．．．ですか．．．．．同じ．．．．．天使を」

「フッフ、愚問ですね。先に反旗を翻したのは、君達の方ではありませんか？ 我らが神は、そこまでお見通しなのです。」

「ケルビム。そろそろ、お喋りを止めよう。予定が狂う」

「はいはい。そうですね、ドミニク」

そういつて、二人の天使はそれぞれの武器を構えた。ドミニクと言う天使は、槍。ケルビムと言う天使は、筆らしき物を手にした。

「．．．．．いい、二人共。ワタシが合図したら、すぐに逃げなさい」

「クロンっ！！ 馬鹿いうなっ！！ お前も一緒に——」

「駄目よっ！！ こいつらの狙いは、十中八九、ワタシ達なんだからっ！！ いいから逃げなさい．．．．．ワタシなら、大丈夫だから．．．．．」

クロンは右手を前に差し出す。そして、その右手は、人外とも思っってしまうように、グニャグニャと形を変えていく

「あまり、見てたくなかったけど．．．．．」

そう言い終える頃には、右手の大部分は黒く染まり、破れた袖が

ら見える、肩の辺りまで達していた。そして、手首には、これも真っ黒に染まったカラスの翼のようなものが出ていた。

「ほう……これはまた、面白い芸当ですねえ」

「御託はいいわ。さつさと掛かってきたらどう？ それとも、天使ともあるう者がこの程度で、怖気づいたのかしら？ 滑稽だわ」

「ふん、減らず口をつ……！」

その瞬間、この3人の戦闘は開始された。クロンは地を蹴り、敵の頭上で広げられた翼から羽根を撃ち込む。しかし、それは全て、ケルビムの筆によって書かれた『護』の文字で一行に当る気配がない。

「……………く。」

俺の後ろで辛うじて立っていたソフィアが倒れた。

「くそっ！……………クロン……………死ぬんじゃないぞ……………」

その後、俺はソフィアを背中に背負い、この戦場を後にした

第8話 ケルビムとドミニク（後書き）

いかがでしたか？ 感想等よろしくです

第9話 秋葉原 巡と倒れたクロン

今俺は、森の中を、ソフィアを抱えたまま懸命に走っている。実際、いろいろな事が一度に起こりすぎて、自分でもチンプンカンプンという所だ。

「あの……」

「どうした？ ソフィア」

「あの方は……クロンさんは、何者なんですか？」

「あいつか？ あいつはただの女の子で、ちょっと毒舌で、でも根は優しい、俺の彼女だ！」

「そう……ですか……」

ああ、それでいい。ぶっちゃけた話、俺もあの姿を見るのは、今回を合わせて二度目で、アレ自身が何なのかは、クロンがいずれ話すだろうと、今まで、伏せておいたため、詳しい事は分からない。

「でも……どうしてですか？ 人間、いえ断罪者である御二人にとつて、私達など、助けてもなんのメリットもないはずなんです。なのに……」

「ばーか。困っている奴が居たら助けたいと思う。それって天使の君になら、理解しやすい事だと思うけど？」

「……はい、そうかもしれませんね……」

その応対が、一時続いた後、いい感じの草陰があったので、そこにソフィアを降ろし、隠れさせる事にした。

「いいか、此処から動くなよ」

「ま・・待ってくださいっ！・・・駄目ですっ！行っちゃいけませんっ！！ 貴方も此処に隠れて——」

「ばーか。彼女をほったらかして、自分だけ逃げる彼氏が、どこに居るんだよ！」

そう言っで、俺は再び、クロンのいる戦場へと舞い戻った。

- - - - - エンジェルズの村 - - - - -

必ず、生きて帰る。とは言ったものの、正直、勝てる気がしないのはなぜかしら？

まったく。変なところで、嫌な廻りが来るなんて、自分で言うのもなんなのだけれど、不幸この上ないわ。

「おやおや。先程の威勢はどこへ消えたのでしょうか？」

「威勢？ そんなの出して勝てるのは中二漫画ぐらいよ？ そんな事も知らないなんて、天使と言うのは意外に無知なのね。ふん、哀れだわ」

「そうですか・・・減らず口を叩ける程度のチカラは残っていますし

たか。しかし、それも風前の灯火ですねえ……」

「ふん。彼方にも同じ事が言えるわね。彼方と一緒に居たあの『ドミニク』とか言う人、もうダウンしているのに。安心なさいな。彼方もすぐ、後を追わせてあげるわ」

「それは……どうもつつ……!!」

敵は、『驍』の文字を大量に生産し、それを弾丸のように放ってくる。ワタシもそれに応じて、広げた羽根で、打ち落としてはいるのだけど、若干、押され気味なのが現状。

そして、当等ワタシのほうは弾切れになり、相手の弾の勢いに飛ばされ、背中から、地面に叩きつけられた。

「くう……」

「まったく。手間を掛けさせないでください」

ケルビムはワタシに近づきながらに口を動かす。

「先に……攻撃したのは……そっちでしょう?」

「我々は、神の名の下での正義を実行したまで。さあ、これで最後です。おとなしく死になさい」

ケルビムの筆から、『矢』の文字を描き、ワタシの胸に当るように狙いを定めている。

ああ、ごめん、あつくん。約束守れそうに……ない。

そして、矢が空を裂く音だけが、辺りにこだました・・・

第9話 秋葉原 巡と倒れたクロン（後書き）

いかがでしたか？

感想等、よろしくです

第10話 クロン、暴走

「では、死にたまえ」

ケルビムがそう言って、向けた矢をワタシに放った。でもそれは、思わぬ形で回避された。

「な……なんと……」

ワタシの心臓を狙って矢は放たれた。だが、その矢は本来あるべき場所には存在していない。

なぜか。それは、『ワタシの右手が、ワタシの意思に関係なく、人間の限界速度を超えて、矢を弾いた』から、と言ったほうがいいのかも知れない。

とにかく、今ワタシが理解した限りで言えるのは『右手の暴走した』、と言う事だ。

「なっ……なんなんだっ！！ お前ハッ！！！！」

先程まで、余裕の表情を見せていたケルビムが、今となっては恐怖や困惑を表情に浮かべている。

倒れたままで居るワタシの意思、神経の伝達などでは、なく、まるで生きているかのように暴れだした右手は、すぐさまケルビムの首を捕らえ、ギリギリと、そしてゆっくりと力をかけながら、痛めつけている。

「く……ぐはっ……」

「どう、したの？……さっきの勝ち誇った顔は……どこへ行ったの……かしら……」

と、こんな感じで呟いてみたものの、ワタシ自身もこのイレギュラーの状態に困惑している。でも、それ以上に……

「た……たすけ……」

必死に助けを求めているこの天使に、ワタシは正直、ひどい憤りを感じていた。

今まで、一方的な暴力ばかりを押し付けてきたコイツが、いざ自らの危機になると、助けを求める。

この行動に、怒りを覚えないものが居るだろうか？

いま、ワタシはコイツを殺そうとしている。さっきまでは、気絶させてやろうと言うくらいで、殺すというまでは思っていなかった。でも、今は違う。

コイツを殺したい。

首を潰し、肉を裂き、骨をズタズタに砕いて、原型を留めてられない位まで、殺したい。

何だろう？ この、快楽に満ちた感じは。

憤怒と快楽、そして恐怖。これらがワタシに、なんとも言えない快楽を与えてくれる。

きつとこれは、暴走したワタシの右手の所為？ だが、今ではそんな関係ない。

ワタシは、コイツを――

「やめろっ！！！！ クロオオオオンっ！！！！！！」

「あ．．．．あつくん？．．．．．」

ワタシは静かにそう呟いた。あつくんが．．．あつくんが居る。いつも、ワタシに文句を言いながらも、楽しそうに接してくれるワタシの恋人が．．．いつも優しい、恋人が傍に居るのに．．．

．
それなのに．．．ワタシは．．．

「くろ．．．ん．．．く．．．ろ．．．」

次第にあつくんがワタシを呼ぶ声が遠くなる。そしてワタシは、ゆっくりと目の前の現実から、自分の中の幻想へと堕ちていった．．

．
．
．

第10話 クロン、暴走（後書き）

いかがでしたか？ 感想等、よろしくです

第11話 ワタシの中の私

「う．．．．．うん．．．．．」

気が付くと、ワタシは見たことない、真っ暗な空間にポツンツと立っていた。本当にどこまでも暗く、上に天井があるのか、下に床が在るのかすら、分からない状態にいる。

「まったく．．．また『これ』だなんて．．．．．」

ワタシの言う『これ』とは、この黒い空間の夢のこと。いつもなら、少しの淡い光が見えて、そこに向かって走ってくのだけれど、今回はそんなもの何処にもなく、本当に希望が潰えたみたいな感じになる。

『．．．．．か．．．．．して．．．．．』

突然の声に、ハツとして声の主を探しているのけど、当然そんなものなど何処にもなかった。

「な．．．なんなの．．．．．」

と嘆息を零している、次の瞬間―― 何か鎖の様なものに、巻きつけられ身動きが取れなくなった。

「っ！！！！！」

どんなに動いても、鎖は離れないどころか、逆に逃がさないように、しっかりと巻き付いてくる。

『無駄だよ……暴れても……』

その声に反応して、振り向くと、真つ黒の翼を持った少女がワタシの前に現れた。

「誰よ？ アンタ」

『私は……ああ。分からないよ？ 名前なんて。もう忘れた』

「では、質問を変えましょう。 どうしてここに居るの？」

『どうして？……それも……分からない』

「では、何が分かるの？」

『分かるのは……私の……遣らなければならない事』

「それは？」

『……お願い。皆を止めて』

「……何のこと？」

『……本当は、私が……遣らないといけないの……けど、私は……貴女に磔られている……呪いでしかないから……だから……お願いっ！！ 皆を止めてっ！！！！』

切実に訴えている少女は、ただ、それだけを繰り返し、叫び続けた。

「・・・ワタシにどうしろと言っの？」

『分からない。・・・ただ、私は、・・・ゼルレッタとセラフィムの皆を・・・』

そう言い残して、少女は闇に消えた。

「結局、何なの？・・・」

そう呟いても、誰も答えてはくれない。そして、ワタシも、彼女と同じように、この空間から消えてしまった・・・

第11話 ワタシの中の私（後書き）

いかがでしたか？

今回は、この先の展開のキーポイントを言っただけなので

分かりにくかったと思いますが、これから、分かりやすくするので
よろしくお願いします。

第12話 クロンの戸惑い（前書き）

お久しぶりです。

第12話 クロンの戸惑い

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

ワタシは、ゆっくりと目を開けた。窓から茜色の日差しが照り、眩しさで目を顰めた。どうやらワタシは、ベットのなかで寝ていたらしい。そして、一時はウトウトしていたけど、夢の事を思い出して、咄嗟に上体を起こした。起こした時に、痛みが走る。その痛みが、ワタシに起きた全てを思い出させてくれた。

「・・・・・・・・結局、アレは何だったのかしら？・・・・・・・・」

一人でそつと呟いた言葉は、風に流れたように儚かった。そして、それが妙に怖かった。結局のところ、いつもワタシは、一人なんだ。ここ最近はいつもあつくんが居てくれたから、こんな気持ちになるのはとても久しぶり。あつくんが居る事を当たり前のように思っている駄目。だって、ワタシは――

「・・・・・・・・ワタシは、化け物なんだもの・・・・・・・・」

そう言つて、膝を抱えようとして時に、ゴトツと何かの音が聞こえた。

音が聞こえた方に、目を遣ると、ベットの端で顔を俯かせて寝ているあつくんが居た。

「~~~~~ツ!!」

驚いて、体をあつくんから、距離を置いた。どうしてもかは分らない。けど、何でだろう？顔が・・・・顔が、熱いよ・・・・。

今、ワタシの中には、何も無いのに……。化け物なのに……。人間じゃないのに……。人間みたい……。・

切なくて、苦しいよ……。・

そして、ワタシはだんだん居た溜まれ無くなって、あつくんを起こさないようにして、部屋から向けだした。

「……。・。お……。・。・。て……。・。・。」

……。誰だよ？さつきから俺に声を掛けているのは。もう少し寝かせてくれって。大体、俺はクロンの看病をだ……。・。クロンの看病？　そういえば……。・。・。

「クロンッッッ！！！」

「うわっ！？」

俺は眠りから覚醒した。やれやれ。俺としたことが、クロンを看病してるときに寝るとは……。・

「……。あの、夕方ですけど、おはようございます。」

「……。アレ？　ソフィア？　どうしたんだ？　お前、二人も居たっけ？」

「寝ばけないでください！　それより大変なんです！」

「？」

「クロンさんが、居なくなりました！」

「おいおい、またそんな冗談を。だってクロンなら此処に――」

そう言って、ベットに目をやると、ソフィアの言ったとおりクロンは居なかった。

「ッ!！」

「だから、言ったじゃな――」

「クロンッ!！」

俺は、クロンを探しに、部屋を飛び出した。

第12話 クロンの戸惑い（後書き）

いかがでしたでしょうか？
感想等、よろしくです

第13話 ワタシにとって、大切なモノ

辺りはもうすっかり夜になり、無数の星達がそれぞれ夜空に飾り、煌いている。

ワタシは、この集落の近くの高い丘の上に立つ大樹に背中を寄せ、ぼんやりと空を眺めている。

どうして、ワタシは、あの時逃げ出したんだろう？

あつくんが居たから？

ワタシが化け物だから？

怖かったから？ それなら何を？

……ああ、そうか。ワタシは、あつくんに――

あつくんの口から、『化け物』だと言われるのが、たまらなく、怖かったんだ……ッ！

小さい頃から、ワタシは聖職者^{グラーチマン}として魔と戦う事を強制的に義務づけられてきた。化け物と戦うためには、自分自身が化け物に成るしかない。ワタシが戦うたびに強くなる一方で、どんどん人間から、切り離され、孤独の淵へと追い遣られていった。でも、それでいいと思っていた。ワタシが不幸になることは同時に、他者の幸福に繋がるのだから。化け物が人間として生きるためには、人間の役に立たなければ成らない。当然のこと。でも――

今のワタシは違う。

あつくんと出逢って、会話して、心を通わせているうちに、ワタシは、一人になるのが堪らなく怖くなっていた。今まで、戦いに対して、死ぬ事に対して、何とも思わなかったのに今は……

怖いよ・・・っ

「ふう、やっと見つけたぜ。」

ふと聞こえた声に、ハツとして、後ろに目を向ける。そこには、いつものあつくんがそこには居た。

「・・・・・・・・あつくん、どうして・・・・・・・・？」

「ああ？ そんなの目撃者が『クロンがこっちに行った』って言うてたから、着ただけだ」

「・・・・・・・・」

「なあ、クロン。いい加減木に隠れてないで、出てきたらどうだ？」

あつくんの言葉に、反応して、木の陰から出そうになった。けど、自分に対する嫌悪感が、それを許すはずも無い。

「・・・・・・・・嫌よ」

「どうして？」

駄目ッ！！ これだけは、言っちゃ駄目ッ！！

「・・・・・・・・ワタシが、化け物だから」

「？」

「ワタシが、化け物だからって言うてんのよッ!!」

「——ッ」

「あつくんも見たでしょう？あの時のワタシを。ワタシ、怒りで我を忘れて・・・いや、違う。怒りなんかじゃない、快樂よ！他人を甚振るのが楽しかった！さっきまで笑ってた奴らが命乞いをした時、どうしようもないくらい、興奮した！こんな人間性に欠けるよ・・・でも！、止められなかった！だから、ワタシは人間じゃないッ！！化け物よッ！ワタシは、いつか・・・大切なモノをこの手で壊してしまっ！そんなの耐えられない！！

だからッ！！ワタシのことはもう、ほっとしてよ・・・ッ
「!!」

「・・・それが、本心か？」

声が目の前から聞こえて、顔を腕の中に埋めて、悲しみに染まっていたワタシは、顔を上げた。そこにはあつくんが立っていた。月明かりを背にしている、顔は良く見えなかったけど、きつと・・・

ワタシと、同じ顔をしていたと思う。

「・・・本当に、それがお前の本心なのか？」

「・・・ええ、そう——」

「嘘をつくのも大概にしるッ!!」

「——ッ！」

「お前の本心は、自分が言ったことの真逆なんじゃないか？」

『ワタシのことはほつといて』。俺には『ワタシを一人にしないで』って聞こえたけどな」

「……………」

「お前はいつもそうだ。いつもいつも、人の気も知らずに自分の意志を貫くのに、こういうときになると、自分に嘘をつく。いい加減にしろッ！！『いつか大切なモノを壊す』だあ！？ そんなの、壊してから言えってンダッ！！ 何も壊してないのに、今何もしてないのに、未来のことグダグダ言ってんじゃねえッ！！」

「……………何よ、ワタシに……………だったらワタシに何しろって言うの——」

ワタシが、思いつきり怒鳴り散らしてやろうと思ったときに、あつくくんは唐突にワタシを抱き締めた。

「……………ああ……………あ」

「……………そんなの決まってるじゃねーか。」

あつくくんがワタシの耳元で囁く。

「お前は、お前のやりたいようにやればいい。化け物だとか、人間じゃないとか、そんな事は一切関係ないことだ。俺の知ってるお前は……………陣堂臥畏クロンは、俺の恋人であることに変わりはないんだからな。」

「ワタシは．．．．．あっくんの．．．恋人にいても．．．
いいの．．．？」

「当然だろ。さあ、言ってみろ。お前は、どうしたい？」

「．．．ワタシっあっくんと、一緒にいたいッ！．．．お願いだよ．
．．．もう、独りは嫌だよ．．．．．」

「．．．．．分かった」

結局、ワタシはその後、ずっとあっくんの胸に顔を埋めて一晩中、
声を上げて、泣いていた．．．．．

第13話 ワタシにとって、大切なモノ（後書き）

いかがでしたか？

感想等、よろしくお願いします

最終話 旅立ちの朝

あの後、俺たちはエンジェルたちのいる村へと戻った。結構遠くのほうまで着たから、帰るのが大変だな・・・

クロンは泣き疲れて眠っており、俺がおんぶして運んでいる。森の中を只ひたすら歩いている。やれやれ、いつもこれくらい素直だと有難いのだけだな。でも、それがコイツらしさでもある。コイツは自分のことを『化け物』だといった。人間性に欠けた、化け物だと。でも、それはクロンの勝手な思い込みなんだ。本当の化け物なら、俺の心配なんかしない。誰かを護るために自分を犠牲にしない。自分の気持ちとは裏腹に、他者を拒絶したりなんて、しないんだ。

だからクロン、お前はお前のまま、ずっと俺の傍に――

「ああ、やっと見つめましたよ。アキさん」

クロンへの励ましを心のうちに語っていると、前方から聞き覚えのある声が聞こえた。そして、その前の人物を確認する。

「着てくれたのか、ソフィア」

「はい、アキさんが居れば大丈夫だとは、思ってたんですけど、やっぱり心配で・・・」

「そっか・・・。迷惑かけて悪かったな。見ての通りクロンは大丈夫だ。直に目を覚ますだろう」

「・・・フフッ」

「？、どうかしたか？」

「いえ、二人はお似合いだなんて思っただけです」

「……そうか？」

「はい」

「……なら良いんだがな……」

こんな取り止めのない会話を続けながら、俺たちは村へと足を急がせた。

数日後

「それでは、行って来ます」

夜が明けて間もない、薄っすらと夜の雰囲気漂うこの村に、クロンは独り、別れを告げていた。そう、俺たちは今、ここを旅立とうとしている。彼らに託された、『神殺し』のために。

「……もう、いいのか？」

俺に背中を見せ、村の方を向いていたクロンは、踵を返す。

「ええ。別段、何かあつて言つたわけでもないし。彼らにはお世話になつたけど、一人一人に挨拶しているわけにもいかないから」

「……そうか、じゃあ――」

「待つて下さいッ!」

俺たちが、行こうとした時、聞き覚えのある声に呼び止められた。そして、声の方に視線を遣ると、そこには、重そうな鞆を背負つた、ソフィアが居た。

「わたしも、一緒に行きます!」

「……止めておきなさい」

「どうして、ですかッ! わたしだって、二人の力になれます。ここに關する地理だって、貴方よりは詳しいです。それに、本当は、わたし達が片をつけないといけなかったことです。だから――」

「アナタがいても、足手まといよ」

「――ッ!」

クロンは、平然として、そう告げた。ソフィアが呆然とし、大きく目を見開いた。

「……けど、どうしても言つなら、勝手について来るといわ」

多分この言葉は、クロンにできる最大の譲歩なのだろう。まったく、コイツは本当に素直じゃなねーな。

「は、はい！ありがとうございます！クロンさん」

嬉しそうな、笑みを浮かべ、ソフィアがこっちに走って向かってくる。俺は、それを見て、クロンの頭に手を置き、軽く撫でた。

「よくできました」

「・・・何のこと？ワタシは『勝手にしろ』って言っただけよ？」

「はいはい」

三人が横一線に並ぶ時には、皆、それぞれの笑みを浮かべている。

「「「じゃあ、行こうか」「」「」

そして俺たちの旅は、始まった

最終話 旅立ちの朝（後書き）

今まで、この『サドな彼女の神殺し』をご覧頂き、ありがとうございました！

御礼、御礼です。ただ、『こんな終わり方』ではあれなので、これから短編でこの作品を続けていこうと思います！

どうも、ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1028i/>

サドな彼女の神殺し

2010年10月11日13時10分発行